

パウル・ティリッヒのアメリカ理解 ——神学的考察を巡って

相澤 一

序

本論は、パウル・ティリッヒがアメリカをどう理解し解釈しているか、そしてその理解や解釈が正当なものであるかどうか、考察と評価を試みるものである。

その理由は主として2つある。

第一に、ティリッヒは「文化の神学」で知られた神学者であり、さらに、ドイツからアメリカに亡命したという経験をした人物でもある。それゆえ、アメリカ文化の神学的解釈者としては最適な人物の一人として彼を選ぶのは正当であると思われる。

第二に、アメリカは、最近の大統領選挙におけるトランプ氏の当選を巡る報道や世界の反響を見るまでもなく、今なお世界で最も重要度の高い国の一つである。そのアメリカを、ティリッヒという20世紀を代表する神学者の一人がどのように神学的に洞察したのかは、神学に関心がある者のみならず、興味をひかれるものであろう。

ティリッヒは著作のあちこちでアメリカに断片的に言及しており、その中には、例えば、アメリカのプロテスタント・キリスト教は道徳教であり教会は道徳クラブと化している、といった、決まり文句のような悪口もある¹。しかし、アメリカを主題とした文章は実は意外と少なく、アメリカの政治政策やキリスト教について書かれた文章はいくつかあるが²、アメリカそのものを主題として取り上げた文章はほとんどない。そんな中、「ヨーロッパとアメリカ——知的地方性 (provincialism) の克服」³という短い文章は、数少ないアメリカをテーマにした文章である。これは、純粋に学術的な論文ではなく、神学的エッセイとも言うべきもので、正直、ティリッヒが全身全霊を傾けて、その神学的洞察のすべてを注入して書き上げた、というようなものではない。とりあえず「有りネタ」を使い回して書いた文章という印象を受ける。しかし、そのような文章であるだけに、普段ティリッヒがアメリカについて考えているあれこれが構成部品として使われており、ティリッヒのアメリカ理解を概観するのに好適である、

- 1 例えば、「アメリカのプロテスタンティズムにおいてのように、道徳的諸習慣の一体系」(パウル・ティリッヒ『キリストと歴史』[野村順子訳、新教出版社、1971年] 209頁) といった言い回しはその典型である。
- 2 例えば「ヨーロッパおよびアメリカの社会秩序に対する教会の意義」(『ティリッヒ著作集』第二巻 [水垣渉訳、白水社、1978年] 129~1454頁) は、アメリカのキリスト教がアメリカ社会に対して与えている影響の分析を試みた文章である。また、ロナルド・ストーン編『平和の神学1938-1965パウル・ティリッヒ』(芦名定道監訳、新教出版社、2003年) には、冷戦や核兵器問題など、当時のアメリカが直面した政治問題についてのティリッヒの文章がコレクションされている。
- 3 パウル・ティリッヒ『文化の神学』(茂洋訳、新教出版社、1969年) 221~244頁、Paul Tillich, *Theology of Culture* (Oxford University Press, 1959) pp. 159-176.

と思われるのである。

無論、この文章が書かれた1950年代と現代とでは、アメリカも、アメリカを取り巻く諸状況も変化しており、書かれていることが今日そのままではまるとは考えにくい。しかし、その洞察が正しいものであるなら、その洞察において用いられたメソッドやビジョン視点は現代の我々にとっても大いに参考になるはずであり、うまくすれば彼の神学的アメリカ分析の21世紀バージョンを手にすることができると思えるのである。

しかし、結論を先に言うと、ティリッヒのアメリカ理解は、ところどころに鋭い洞察はあるものの、全体としては非常に問題であり、その妥当性は疑問である、と言わざるを得ないのである。

1 問題と方法

ティリッヒがアメリカにやって来たのはナチスにより公職を追放されたからであり、決して自らの意志で望んで渡米したのではない。言ってみれば、不本意な出来事であった。しかし、そこで彼は地方性の克服に出会ったのである。「彼を何にもまして喜ばせ、また驚かせたのは、アメリカの同僚たちの終始かわらぬ、自発的な寛大さであった。……移住者から世界市民に変身する過程で、彼はかつての自分の考えこそが地方的であったことを、認めざるを得なかったのである。アメリカ人たちが避難民に接する態度は、自分にとって民主主義の最初の学習であった、と彼は言った」⁴。

この体験が、彼のアメリカ理解の原体験であり、また、「ヨーロッパとアメリカ——知的地方性の克服」の主題となっている。「アメリカは、諸氏をヨーロッパや他国の地方性（provincialism）から救うことができるけれども、諸氏自体を地方的（provincial）にさせる必要はないのだ。この国（アメリカ）では、世界中からの伝統の間にギブアンド・テイクの関係があったし、今もなお存在しており、このために、アメリカ地方性の成長をいちじるしく困難にさせている」⁵。

これは、今日風のグローバル&ローカルとの対比を用いて言うなら、アメリカは、アメリカン・ローカリズムの場ではなく、グローバルな人と思想の交流が起こる場である、ということである。それは、アメリカが、単なる多くのローカルなローカスの中の一ローカスではなく、グローバルなローカスという特殊な場であるという風に言い換えることができるであろう。

そして、ティリッヒはこれに続けて、「それに理論的分析をしよう」と言い、「先ず第一にこの国における過去二十数年来、ドイツの学問的観点の変化を述べ、次にアメリカがますます受け取る準備の整ったドイツ的伝統の諸要素について論じることにしよう」⁶と言う。

率直に言って、読者は、なぜドイツ神学の変遷史の記述がアメリカのグローバル性の理論的分析になるのか、不審に思わざるを得ないであろう。しかし、本論を読むと、実際にティリッヒが行っているのは、アメリカのキリスト教、特にその神学的特色をドイツの神学との関係から記述することであり、換言すれば、一方にドイツ神学、もう一方にアメリカ神学を置いて、両者を対称させながら記述を行うことなのである。

4 ヴィルヘルム&マリオン・パウク『パウル・ティリッヒ 1 生涯』（田丸徳善訳、ヨルダン社、1979年）181頁。

5 ティリッヒ『文化の神学』222頁。

6 同。

この方法がアメリカのグローバル性の分析として適切であるかどうかはさておき、ドイツで長年過ごし、その間に蓄積されたものを背負い続け、それゆえアメリカではよそ者目線で過ごさざるを得なかったティリッヒにとって、もっとも自然な見方である、とは言えるであろう（もっとも、このよそ者目線、つまり自分はアメリカとは違うという自覚が、結果的に彼のアメリカ理解を狂わせてしまっていると思われるのであるが、それは後述する）。

2 アメリカにおける神学の特色（1）理論と実践の一致

A 理論と実践の一致の背景＝カルヴァン主義＝福音主義的急進主義

ティリッヒがアメリカの神学の主要な特色として挙げるのは、①理論と実践の一致、②全世界的・エキュメニカルな広がり の2点である。以下、これらを順に論じていく。

アメリカの神学における、理論と実践の一致は、ヨーロッパにおいては理論と実践が分離しているのと異なる、アメリカの特色である。ティリッヒは「実用主義的（pragmatic）試験の光に照らされた理論の妥当性」⁷と表現しているが、実践重視・実用性重視と言ってもいい。

「ここ [アメリカ] で私たちは何を見たか。先ず神学では何を見たか。実に多くの新しいものを見た。その中で恐らく最も重要なものは、理論と実践との関係についての全く異なった理解を知ったことであろう。普通私たちがドイツで考えているような、理論がいかなる実践的適応からも独立していることは、アメリカ神学の実証主義的経験主義的研究法（the pragmatic-experiential approach）では、全く疑問視されていた」⁸。

ティリッヒは、この実践重視的な態度の背景には「福音主義的急進主義（evangelical radicalism）」がある、と言う。「このような [実践重視的な] 態度全般、また特に神学における態度の背景というのは、大きくアメリカ精神を形成し、経験をもって人間の知的生活の全領域における中心的概念として来たところの、福音主義的急進主義運動において宗教経験が強調されているところにある。アメリカ歴史の初期に強いカルヴァン主義的影響が……神の国の歴史における実現化を強調して実用主義の手がかりに大きな貢献をなした」⁹。

福音主義的急進主義運動というのは、通常はアナバプテストとのようなラディカルな宗教改革左派を指す言葉であろうが、文脈的にはティリッヒはそういった集団ではなくピューリタニズムを指しているようである。とはいえ、ピューリタニズムとカルヴィニズムはイコールではないし、アナバプテストともイコールではないのであるが、ティリッヒは意識的にか無意識的にか、そのへんの区別をあいまいにしたまま論述を行うのである。

B 社会倫理と中間的原理、進歩主義

そして、実践重視の傾向から生まれる重要なアメリカ神学の特徴は、社会倫理を強調することである。「アメリカ神学の栄光は、歴史部門にあるのでもなければ教理部門にもなく、社会倫理面に輝いてい

7 同228頁。

8 同。

9 同。

る」¹⁰。

無論、ヨーロッパのキリスト教神学にも社会倫理はある。しかし、ヨーロッパとアメリカの違いは、ヨーロッパ神学がキリスト教メッセージの絶対的原理を具体的な政治状況に適応させるという課題を十分に処理できなかったのに対して、アメリカは「むしろ利口な方法で直面した」¹¹ことにありとティリッヒは考える。それは、アメリカ神学が「愛の絶対的原理と常に変化する具体的な状況との間に、両者間を媒介する中間的原理 (middle axiom) のあることを発見した」ことであり、それは「民主主義、あらゆる人間の尊厳性、法律における自由など」¹²である。

これらの原理は、不変の真理ではなく、「究極的原理と具体的な状況との間を媒介する」¹³のであり、この媒介があるおかげで、アメリカではヨーロッパのように両者が切り離されてしまうことから、両者が混同されることも防がれることから、原理的には守られるのである。「この考えは、キリスト教メッセージがある特定の政治的問題と同一視されることを防いでいる。しかし他方ではこの考えは、キリスト教が、人間の歴史の実存の持つ具体的な関係から離れることのできないものたらしめている。このようにアメリカ神学は、キリスト教社会倫理に対して新しいアプローチを創造し、またキリスト教メッセージを神と個人との関係に対するのみならず、神と世界との関係に対しても適切なものたらしめた」¹⁴。

これにより、アメリカの神学は、垂直面の深さを欠くという欠点を有するが、同時に「水平的進歩の可能性」や「人間的可能性の進歩的な具体化」¹⁵に目を向けさせるという偉大なアドバンテージがもたらされているのである。

C 教会の相対性

次にティリッヒは、アメリカの教会が諸社会団体の一団体として相対化されていることを指摘する。「アメリカのキリスト教においては、教会は多くの社会的代理店の一つ (a social agent among others) であって、何にもまさって魅力に満ちたものであろうとしている。それゆえ……実践的要求が興味の中心となっている。人間をよりよくすること、人間を一人格たらしめること、社会環境をよりよくすること、神の国をこの世に実現すること——これらが教会の機能である」¹⁶。つまり、実践的要求にどの程度答えているか、という魅力によって相互に訴求力で競合関係にあるのがアメリカの教会だ、というわけである。

実はこれは極めて重要な指摘である。なぜなら、それはヨーロッパには見られない特色であり、その違いは国教会体制と政教分離体制の違いに由来するからであり、さらに、アメリカにおける政教分離の

10 同229頁。

11 同231頁。

12 同。

13 同。

14 同231～232頁。

15 同232頁。

16 同233頁。なお、「社会代理店」と訳されている単語は、原語はsocial agentであるが、文脈から考えると、social agencyすなわち社会団体くらの意味でティリッヒはこの語を用いていると思われる。

ルーツはまさに建国期のキリスト教にあるからである。しかし、ティリッヒはこれについてはあまり踏み込まず、次の話題に移ってしまう。

3 アメリカにおける神学の特色（2）エキュメニカルな性格

アメリカ神学の第二の特色として指摘されるのは、「この〔アメリカの〕プロテスタンティズムの全世界的水平面の広がり」¹⁷であり、いわゆるエキュメニカルな性格である。それは、他教派、そして他宗教に対する受容的な態度として表れている。

A 教派を越えた広がり

まずは、プロテスタント内の教派を越えた広がりである。「多くの教派的教会の存在している事実が、あらゆる人に自らの教派以外にもプロテスタントの表現の可能性があるというような実存的方法を表わしている」¹⁸。そして、このことは、プロテスタント諸教派を越えて、「宗教改革以降また以前の教会の歴史的発展の異なった系列に目を向けさせることとなる」¹⁹。かくして、ローマ・カトリックや聖公会といった、西方教会全体も、その拡がりの中に入って来る。

B 地域を越えた交わり

さらにティリッヒは、「全教會的観点から、さらに驚くべき事実が示されている」と言う。それは、具体的にはユニオン神学校のエキュメニカル性であるが、「ユニオン神学校のようなプロテスタントの大学が、ギリシア正教の大学、聖ウラディミヤ神学校と密接に関係づけられていること」、「おおよそキリスト教思想と生活とに対立する派、つまりユニテリアン主義が、アメリカでは生きた実在であって、全神学的状況に対してなお直接的に、またさらに間接的に明らかな影響を与えている」こと、さらに、「アジアやアフリカのようないわゆる若い教会が、神学研究や教会活動のためのアメリカでの大きな大学における常なるお客であること」²⁰などである。東方教会、非正統的な教会、非西洋世界の教会に及ぶ広がり、アメリカのキリスト教界には存在するのである。

C 宗教を越えた広がり

さらに、この広がり、キリスト教という宗教すら越えた広がりとなっていく。「以上述べたことにもまして、アメリカと極東や近東との間に密接な交流が行なわれ、これが恒久的な大宗教すべての代表者を、アメリカの諸大学や研究所に招く結果となった……キリスト教ではない宗教のすぐれた代表者たちとの実存的な接触によって、人々は、神はこれらの諸宗教からそうかけ離れたものではなく、そこには普遍的な関係があるということを認めないわけにはいかなかった」²¹。

17 同234頁。

18 同。

19 同。

20 同235頁。

21 同235～236頁。

D エキュメニカル=カオスでなく併存状況

このように、アメリカのキリスト教世界には、教派、地域、さらに宗教さえも越えた広がりが存在しているが、それは、戦国乱世的な状況ではなくて、並立・並存状況、いわゆる多元的 (pluralistic) な状況である。「アメリカ神学の大きな水平面内に永久に表わされる種々な見解の多様性にもかかわらず、この多様性というのはお互いに対立し闘争するものではなく、討論、競争そして団結力を意味している」²²。このような平和共存は、ユニオンのような超教派的な神学校、またNCCのような団体に典型的に表れている。

このような並立と共存は、本来は、先に触れた、教会の社会的相対性、さらにその原因となっている政教分離との関連において本来は扱われるべきものと思われるのであるが、ここでもティリッヒは深入りせず、次の議論へと進んで行く。

E ノミナリズム

こうした、アメリカに見られるキリスト教の広がり、そして、その広がりがある理由に関して、ティリッヒは以下のように洞察する、「中世的な討論を決定づけた、いわゆる名目論 (nominalism) と呼ばれているような、実在に対する一つの基本的な態度が示されている……アメリカの神学生たちに、『あなた方は生まれた時から名目論者である』ということは、間違っていないのである」²³。

ティリッヒによると、ノミナリスティックな態度の結果は「真理の中心ではないにしてもその周囲に立っている感情」²⁴である。これは、謙遜な態度を生み出すと同時に、時として究極の真理探求の完全な拒否を生み出すこともある。すべての試みは真理の中心に向かうステップであり、その限りにおいて真理そのものではないし、また誤っている可能性を常に含む。かくして、「実証主義的、実験的態度は、人間の有限性に対する謙虚な認識と、私たちと究極的に関与する真理に関する問いに対して傲慢な却下という二つのことを行なう」²⁵のである。

このような態度は、「今まで数十年間アメリカの哲学界に偉大な役割を演じていた論理実証主義を理解せしめる。またこれは、人間が実在の本質的構造と認識的に関与するという理想主義的主張を避けようと望む哲学者たちの謙遜さの表われとして、理解しうる……しかしまた論理実証主義は、人間存在に関する課題から避けたいという望みとして解釈しうる」²⁶。要約して言うと、ノミナリズムは自身の相対性の自覚を伴う相対主義を生み出す、とすることが出来るであろう。

この部分のティリッヒの議論は明確である。アメリカのキリスト教世界には、ヨーロッパ世界には見られないような、教派、地域、宗教すら越えた共存的広がりがあるが、その精神的根源はノミナリズムに由来する相対主義的態度だ、というわけである。

22 同236頁。

23 同237頁。

24 同。

25 同。

26 同238頁。

4 結語

このような、アメリカについての分析の後に、ティリッヒはこう語る、「この [アメリカ的な] 態度や概念が私たちに与えて来た印象の持つ危険性は、私たちが別の地方性、つまり今度はアメリカの地方性に押しやられるのではないかということであった。しかし、実際にはそうならなかった。私たちがアメリカ合衆国へ避難民としてやって来た時に、友人たちが私たちを取りなしてくれた方法というのは、決して私たちをアメリカ化しようとするものではなく、アメリカ全土に私たち自身の方法で貢献せしめるというものであったことは、明らかであった。誰も……私たち自身の経験や概念を服従せしめようとする同化作用を命じはしなかった」²⁷。

ティリッヒが求められたのは、アメリカ化ではなく、むしろドイツ的な独自性をもってアメリカに貢献をすることであった。「アメリカの友人たちは……私たちに同化を求めず、かえって私たち独自の基礎の上に独創的な創造性を創造することを明らかに求めて下さった。……私たちは、アメリカ地方性に投げ込まれる代りに、神学や哲学でアメリカ思想に影響を与えて来た。そして今後もまた、アメリカを動かして行くような影響を与えることができるであろう」²⁸。

これが1930年代にアメリカにやって来たティリッヒに起こったことであったが、しかし、その後世界も変わりアメリカも変わった。その中でもなおアメリカはなお開かれた国であり続けることができるか、とティリッヒは問う。「アメリカの精神生活に20年以上貢献してから私自身に起こった疑問というのは、『アメリカは、私に対してそうであったもの、つまりあらゆる国からやって来る人々がそれぞれの精神的地方性を克服する国として、とどまることができるだろうか』ということである。……『アメリカ生活様式』の強調が、このような状況を生み出しはしないだろうか。そうなるような真剣な危険性はある」²⁹。

しかし、この話題はこれ以上展開されることはなく、以下のような言葉でこの文章はキレイに終わる。「私たちがやって来た時のアメリカは、開放的であった。そしてこのアメリカは……私たちを自由にしたのだ。このために、私たちはアメリカ地方性のために働いているいかなるグループに対しても戦いを挑むのであり、また神学のおよび哲学的地方性も含めて、あらゆる地方性がくいとめられ、克服されるようなアメリカのために、私たちは働くのである」³⁰

5 評価と考察 (1) 理論と実践の一致を巡って

以上、ティリッヒのアメリカ論を概観してきたが、その要点は2つである。

(1) アメリカのキリスト教の特徴の第一は理論と実践の一致である。それは宗教改革急進派に根源を持つ。彼らは神の国の歴史的実現を強調することに由来し、そこから、社会倫理の強調、中間的原理の定立、進歩主義、教会の社会団体化といった諸特徴が出てくる。

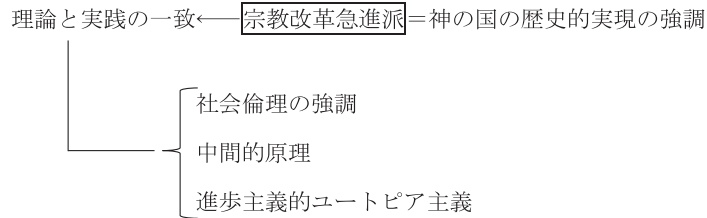
27 同239頁。

28 同240頁。

29 同243頁。

30 同243～244頁。

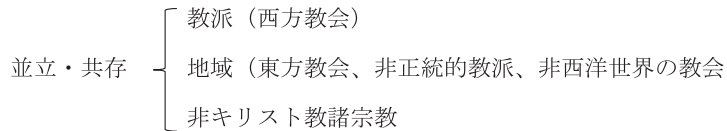
[図1]



(2) 第二は、教派、地域、宗教を越えた共存という広がりを持つことである。それはノミナリズムがもたらす相対主義的な真理観に根源を持つ。

[図2]

ノミナリズム → 相対主義的態度



A ティリッヒのピューリタン理解は適切であるか？ ピューリタンと宗教改革左派

「ヨーロッパとアメリカ——知的地方性の克服」の中では、アメリカのキリスト教伝統のルーツは「福音主義的急進主義運動」、「カルヴァン主義」などと呼ばれていて、不思議なことにピューリタンという単語は出てこない。しかし、アメリカがピューリタンの国、という認識は、先入観、偏見と言ってもいいくらいティリッヒがドイツ時代から変わらず持っていたものである。そのせいで、アメリカの娯楽を見て驚くようなこともあったようであるが³¹、それはさておき、ティリッヒのピューリタニズム理解は、自分のルーツであるルター派と敵対したグループの一派、というものである。それは、以下のような言葉に表れている、「アメリカにおいて強い影響力をもつようになった宗教改革のセクト主義者たち」³²、「ルターの熱狂主義者 (Schwärmer, evangelical radicals) との抗争は、アメリカにとって特別に関心あることである。なぜならアメリカのプロテスタンティズムは大体において宗教改革から直接由来するものではなく、熱狂主義者やセクト的運動によって媒介されたものだからである」³³。

先に触れたように、宗教改革左派やセクト主義者といえ、通常はトーマス・ミュンツァーやアナバ

31 「その晩には道化芝居も見たが、ティリッヒはそれを、パリで見たどの芝居にも劣らないと思った。これは、彼には驚きであった。というのは、彼はアメリカは清教徒 (ピューリタン) の国であると確信していたからで、それは彼が決して完全には抜け切れない先入見の一つなのであった」(パウク『パウル・ティリッヒ 1 生涯』181頁。

32 『ティリッヒ著作集』別巻二 (大木英夫、清水正訳、白水社、1980年) 281頁。

33 『ティリッヒ著作集』別巻二365～366頁、Paul Tillich, Carl E. Braaten ed., *A History of Christian Thought, From Its Judaic and Hellenistic Origins to Existentialism*, Simon and Schuster, 1967-1968) p. 239.

プテストたちといった、ルターと同時代の集団を指す。しかし、ティリッヒはそれらとピューリタニズムを区別していないようである。ということは、厭味な言い方になるが、アナバプテストとバプテストも区別していないのであろう。実際のピューリタンたちは、アナバプテストの系譜に連なるものとみなされることがないようかなり気を配っていたのであるが、ティリッヒはそういうことには特に関心を払う様子はない。

「ロシアのキリスト教は、いわゆるマルキシズムという別の種類の、ピューリタンの性格と狂信的信仰の社会運動に征服されることとなった」³⁴という発言もある。アナバプテストは、マルクス主義的な歴史家から「社会主義の先駆者」と位置づけられることがあることを知っている者にしてみれば、ティリッヒがアナバプテストとピューリタンを同種のものとしなしていることはほぼ明らかであろう。

敢えて言えば、プロテスタントを大きく二分し、一方にルター派、他方に反ルター派・非ルター派と置けば、アナバプテストもカルヴィニズムも同じグループに入るとは言える。しかし、それはいささか大雑把に過ぎるであり、従って、ティリッヒのピューリタニズム理解も、そしてそこから出てくるアメリカ理解も、精確さを欠いてしまっているところがあると言わざるを得ないのである。

B 進歩主義・ユートピア主義はアメリカ的な特徴であるか？

ティリッヒは、ピューリタニズムがアメリカに与えている最大の影響は、それがユートピア主義と呼べるような進歩主義的歴史観を与えていることである、と考えているようである。確かにそれは、ルター派とは明らかに異なる、宗教改革左派に見られる特色である。「ルターと熱狂主義者とのあいだに、終末論に関する相違点がある。宗教改革者たちが、セクト主義者たちがおこなった国家制度に対する革命的批判を承認しなかったのは、それを宗教改革者の終末論がゆるさなかったからである。宗教改革の終末論は神の国の到来に向けられており、したがって垂直次元に向かうものであって、水平的方向の発展とは何の関わりもない……この二つの神学のあいだの相違点は、歴史の将来に対するアメリカの態度とヨーロッパの態度の相違において明らかに出てくる。セクト運動の影響のもとにアメリカでは、現実世界の改造のための努力がなされる」³⁵。

しかし、そのような態度がユートピア主義に流れる危険性もティリッヒは指摘する。「キリスト教でもカトリックやルーテル派では、歴史におけるユートピアの成就を期待するような誤りを犯すおそれはあまりありませんが、アメリカのプロテスタンティズムの特徴的な有力な教派の型には、このおそれがあります」³⁶。

アナバプテストたちが革命運動的な社会運動を行ったのは歴史的事実であるし、ルター派がそれに敵対したのも歴史的事実である。しかし、だからと言ってルター派の敵対者たちを一括りにユートピア主義者とみなし、アメリカの進歩主義的態度はその影響である、と言ってしまうのはいささか大雑把に過ぎるであろう。進歩主義者やユートピア主義者の中にも、急進派と穏健派がいるであろうし、急進と穏健との間のグラデーションもある（第一、当の宗教改革左派はドイツで起こった運動のはずである）。

34 ティリッヒ『文化の神学』253頁。

35 『ティリッヒ著作集』別巻二370～371頁。

36 パウル・ティリッヒ、高木八尺編訳『ティリッヒ博士講演集 文化と宗教』（岩波書店、1962年）118～119頁。

それを、ルター派對反ルター派という二分法で論じるのは、精確さを欠く議論となってしまう。

例えば、ユニオン神学校におけるティリッヒの同僚であるラインホルド・ニーバーは、当時のアメリカ神学におけるキリスト教社会倫理の代表者であり、当時のアメリカ神学世界のアイコンでもあった。「学生の大半はキリスト教の聖職に備えて、聖書研究や説教などの実際的な訓練を受ける者たちで占められていた。いくらかでも神学に関心を抱く者があっても、彼らは主に社会的福音や社会倫理の線でものを考えていた。……以前は諸学の女王であった神学は、今や社会倫理の侍女になっていたのである。この時代の精神を、ラインホルド・ニーバーほどよく象徴していた人物はほかにいない」³⁷。

しかし、そのニーバーは社会倫理の代表的人物でありつつ、進歩主義的・ユートピア主義的な歴史観には反対であったのである。「この国にやって来たヨーロッパ人たちは、一般的なアメリカのグループや人々——たとえばラインホルド・ニーバーと言ったような——の中に潜在的にあった反ユートピア的力に協力しそれを力づけた」³⁸。

当時のアメリカのキリスト教社会倫理を代表する人物であるはずのニーバーが、ユートピア主義ではないのである。逆に、ユートピア的でないはずのドイツ神学界からはユルゲン・モルトマンの『希望の神学』のような神学が現れたりもしている。アメリカ＝ユートピア主義、ヨーロッパ＝非ユートピア主義というのは、ゆるやかな傾向としては言えるかもしれないが、二分法で考えるのはやはり無理があると言わざるを得ないであろう。

C 理論と実践の一致とピューリタニズムの結びつきは？

また、理論と実践の一致が強調され、社会倫理が主役となった結果、理論的な神学研究が脇に押しやられている、という指摘であるが、宗教改革急進派の中には、確かに聖霊を強調し、最近はやりの用語で言えば反知性主義的なグループもあった。しかし、アメリカのピューリタニズムは反知性主義とは真逆の、知性主義とも呼び得るような性質のものであったことが近年の歴史研究で明らかになっている³⁹。

そうした歴史研究が明らかにしたのは、アメリカのキリスト教が全体として反知性主義的な性格を持つようになったのは、ピューリタンよりもむしろ信仰復興運動の影響であるということである。実践が強調されることと、社会倫理また社会の改善が強調されることを、ピューリタニズムからだけ説明しようとするのは、今日では無理があるであろう。

ティリッヒがこの文章を書いたのはホーフスタッターの『アメリカの反知性主義』⁴⁰が出版（1963年）される前でもあるし、アメリカのキリスト教的ルーツは確かにピューリタニズムにある、という歴史に照らして考えると、ピューリタニズムに実践重視という傾向の歴史的ルーツを求めるのは、時代を考えればそれほどの外れではなかったのかもしれない。しかし、ティリッヒがルター派と反ルター派という二分法図式で考えた結果、信仰復興運動が死角に入ったのだとすれば、それは時代的制約よりも構造的

37 パウク『パウル・ティリッヒ 1 生涯』208頁。

38 ティリッヒ『文化の神学』242頁。

39 例えば、森本あんり『反知性主義』（新潮社、2015年）31～51頁などを参照。

40 邦訳は、原著出版から40年後に、ようやく出版された（田村哲夫訳、みすず書房、2003年）。

欠陥ということになる。このことについては、後ほど触れる。

D 中間的原理のルーツはどこにあるか？

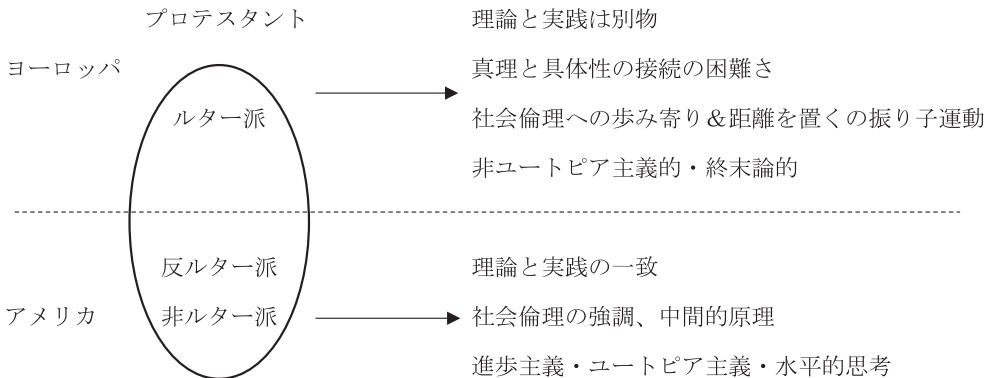
アメリカには、民主主義、人間の尊厳という概念、自由の法的保障などの中間的原理——究極的原理と具体的状況との媒介物——が存在することをティリッヒは指摘しているが、なぜそれがヨーロッパには存在しないのにアメリカには存在するのか、ティリッヒは説明しない。ティリッヒは、アメリカは「利口な方法で直面した」⁴¹という言い方をしているが、そこから分かるように、何か特定の歴史的要因から、原因と結果のような仕方でもまれたという形で説明しない。アメリカの利口さというなら、その利口さは何に由来するのか説明して欲しいと読者は願うであろうが、ティリッヒはそうしようとはしないのである。

これは、エルンスト・トレルチの「文化価値の倫理学」の流れで、信教の自由や政教分離の法制化を巡ってピューリタンたちが築き上げたものを、プロテスタント文化価値として捉える見方によってはじめて把握できるであろう。この見方は、大木英夫氏が一連のピューリタン研究の中で明らかにしたものであるが、我々は、ティリッヒが中間的原理と呼んでいるものをプロテスタント文化価値とみなし、そこにピューリタニズムの、ひいてはプロテスタントそのものの歴史的意義を見るという見解に大いに教えられるものである。この見方はティリッヒにはないものである。ティリッヒは、ただそういうものが存在することを指摘するだけにとどまっている。

まとめて言うと、ティリッヒのこの部分の議論は、ヨーロッパとアメリカを比較するに際し、一方にルター派、他方に反ルター派・非ルター派を置き、両者の違いを、そして、アメリカに見られる、理論と実践の一致、社会倫理の強調、中間的原理の定立、進歩主義的ユートピア主義、教会の一社会団体化といった諸要素を、反ルター派的諸グループというルーツから説明しようとしている。そして、その対称物としてルター派、そしてヨーロッパ的あるいはドイツ的なものを、そこから生まれるものとして配置している。

しかし、肝心の出発点が、アナバプテストもカルヴァン派もピューリタンも全部いっしょくたに「反

[図3]



41 注11を参照。

ルター派的なグループ」という乱暴な括り方をしているせいで、先に見たように、例外が多過ぎたり、説明しきれない部分が出てきてしまう議論となっている。

とはいえ、アメリカの歴史の原点にピューリタニズムがあるのは事実であり、確かにピューリタニズムは大きく括れば反ルター派の流れの中にあるのではあるから、アメリカのあれこれをそこから説明しようとする試みは、「まあ、そう言えば言えなくもないけど、でも、それだけじゃないよね」という、説明として不十分ではあるが、根本的に間違っているとは言えない、というものではあると言える。

6 評価と考察（2）エキュメニカルな性格を巡って

A エキュメニカルな性質の由来をどこに求めるか——歴史か、思想か？

しかし、後半の、ノミナリズムを巡る説明は、非常に問題があり、とうてい首肯できないものになっている。

ティリッヒは、ノミナリズムから生まれた、一種の相対主義の如き思考によってアメリカの教派・地域・宗教を越えた共存状況が生まれていると言う。

しかし、奇妙なことに、別の文章では、ティリッヒは別の歴史的由来を指摘しているのである。「この国 [アメリカ] においては、教会と国家との分離、つまりローマ教会およびプロテスタント教会両者に対立する宗教改革の福音主義的国教反対者たちの闘争の最終的な結末を見る。私たちはこの遺産を誇りとし、宗教の自由が私たちの享受している枚挙にいとまのないあらゆる自由の中に内包されている」⁴²。

この文章では、政教分離と信教の自由の歴史的由来を明らかにピューリタニズムに見ている。

さらに、民主主義の源泉もやはりプロテスタンティズムにあるとティリッヒは捉えている。「カルヴィン派プロテスタンティズムと、普通宗教改革時代の分派的運動と呼ばれている福音的急進主義……がアメリカにおいて、またそれ以前にカルヴィンのジュネーブにおいて、私が民主主義的指導力と呼びたいところのあるものを樹立したのであります」⁴³。

また、民主主義のさらに根底には寛容の精神があり、その力の源もまたプロテスタンティズムであると指摘している。「プロテスタンティズムは……最高度の社会的力なのだ。それは、民主的過程を通して、政治的決定、社会理想、生活方法、国際的活動に影響を及ぼしている。……この力を可能ならしめているのは、寛容の原則である。……民主主義における寛容の過程というものが、力を与えているその瞬間においてさえ寛容を破壊せざるをえない人々に対してさえ、寛大に取り扱わねばならぬというのである」⁴⁴。

また、ロジャー・ウィリアムズとロードアイランドのバプテストたちが「ピューリタニズムの宗教的独裁に反対して、寛容の思想を擁護した」という記述もあるが⁴⁵、これは、ピューリタン対反ピューリタンではなく、信教の自由という初期衝動を忘れた、いわば元ピューリタンに対する、バプテストとい

42 ティリッヒ『文化の神学』249頁。

43 ティリッヒ『文化と宗教』143～144頁。

44 ティリッヒ『文化の神学』250～251頁。

45 『ティリッヒ著作集』第二巻138頁。

うピューリタンの別の流れによる抵抗というのが歴史的事実である。

ともあれ、ここで問題になるのは、アメリカのキリスト教の大きな広がり、その由来を歴史的出来事に求めるのと、それとも思想に求めるのと、どちらが正当であるか、ということである。

B ノミナリズムという解釈の妥当性は？

当たり前のことをここで確認するが、アメリカに諸教派や諸宗教が併存あるいは共存するのは、政教分離すなわち国教会や国教が存在せず、法律によって信教の自由や言論の自由、結社の自由といった人権が保障されている、寛容を是とする体制があるからである。

諸教派や諸宗教が一つの社会に共存しているのは、人々が相対主義だからではなく、ましてや人々がノミナリストだからではないはずである。

また、ティリッヒは、「アメリカの学生たちは、生れつきの唯名論者でありまして、彼らは実在の個々のことはよく知っておりますが、普遍的なものをよく知らないのであります」⁴⁶とは言うが、その理由や歴史的由来は説明しようとしな。まさか、ルター派はリアリストで反ルター派はノミナリストだ、とは言わないであらう。

さらに、揚げ足取りのようになってしまうが、ティリッヒは、「私は存在を存在の力として把握するという私の比較的リアリスティックな思索に基づいて唯名論に抵抗しないような日は一日もないほどである」⁴⁷と言っているが、それは何のための戦いなのか。ノミナリズムに由来するアメリカのエキュメニカルな状況を、ティリッヒはよくないものと考えているということか。ノミナリズム的包括性よりも、リアリズム的包括性の方が優れているということか。あるいは、ティリッヒのリアリズム的思考に基づいた、初期の信仰的相対主義⁴⁸、あるいは後期の宗教史の神学⁴⁹に基づいた広がりの方が、現状のアメリカ的な広がりよりもよい、ということか。

C 果たしてこれは結論か？

最後に、この文章は、アメリカはグローバルなローカスである、ということから始まり、アメリカではアメリカンというローカルになることを強制されない、というのが結びである。しかし、ここまででなされた議論が、この結びとどう関係があるのか、読者はとまどわざるを得ない。

アメリカのキリスト教のエキュメニカルな、あるいはエキュメニカルを越えてグローバルですらあるような広がりが、ティリッヒがアメリカ化を押し付けられなかったことの原因なのだろうか。しかし、そうだとすると、先に触れたように、その広がり理論的理由となっているノミナリズムに対してなぜティリッヒが戦う必要があるのか分からなくなってしまう。

本論の最初の方で「これは、純粋に学術的な論文ではなく、神学的エッセイとでも言うべきもので、

46 ティリッヒ『文化と宗教』90頁。

47 『ティリッヒ著作集』別巻二232頁。

48 パウル・ティリッヒ『カイロスとロゴス』（菅田吉訳、教文館、1944年）84～85頁。

49 パウル・ティリッヒ『宗教の未来』（拙訳、聖学院大学出版会、1999年）102頁以下。

正直、ティリッヒが全身全霊を傾けて、その神学的洞察のすべてを注入して書き上げた、というようなものではない」と書いたが、そう考える理由はここにある。主著が*Systematic Theology*であるティリッヒが、もし学術的にキチンとした論文として書こうとしたなら、とりあえず「よさげ」なことを言って終わる、というのではなく、ちゃんと結論が結「論」になっているような、システムティックな論述をしたであろうと思われるからである。

7 結論——ティリッヒの歴史論の問題点とその克服

A ティリッヒの歴史論の何が問題なのか？

ティリッヒは、物事を形而下ではなく形而上、表層ではなく深層を見ようとする。それは社会を見る際にも同様である。「宣伝を忘れ、共産主義社会といったような歴史的事実のさらに深いレベルを見るということは、時として正当なことである。同様の方法が、私たち自身の社会を分析するのに適用されねばならない」⁵⁰。宗教的なものを手掛かりとする際も、目に見える宗教現象ではなく、「究極的関心事の状態としての宗教の光に照らして見る」⁵¹。

ティリッヒは、ヨーロッパの神学について、「ヨーロッパにおいては、教会の課題は教会の究極的基礎に関する課題であり、神学はその基礎を完全に均整のとれた神学体系で説明することが求められる」⁵²と語っており、それゆえ神学は「究極的真理の適切な公式化のための探求という機能」⁵³が求められると言う。しかしこれは、ティリッヒが自身の神学の課題とみなしている事柄であるとも読める。

しかしそれは、アメリカ的な神学の方法とはまったく異なるものであった。「ティリッヒは……人間の行動の背後にある思想を考察し、理論を構築して注意ぶかく展開し、最高の真理を定式化しようと試みる静かな、学者的な大学教授で、新しい世界とは殆ど反対のもののように見えた」⁵⁴と言われる通りである。

このような、表層から深層へ、ティリッヒの好む表現を借りれば、surfaceからabyssへ、という動きは、2つの誤りの危険性がある。第一は、深層に至る入り口としての表層を選び間違えて、間違った深層に至ってしまう危険であり、第二は、その深層の具体的表れとしての表層を——なにしろ、一つの深層からは多種多様な表層への展開が想定できるのであるから——誤って指さしてしまう危険である。端的に言えば、深層と表層、上昇と下降が噛み合わないで、ちぐはぐになってしまう危険性である。

ティリッヒのアメリカ論では、最初の議論においては、福音主義的急進運動という大き過ぎる括りをしてしまい、そこから出て来る理論軽視やユートピア主義は必ずしもアメリカにあてはまらず、また、教会の一社会団体化は説明出来ない、といった食い違いが見られた。また、第二の議論では、アメリカの宗教の広がりがないノミナリズムから説明されるという、理論的にはあり得るかもしれないが、およそ歴史的事実とはかけ離れた主張がなされた。これもまた食い違いであろう。

50 ティリッヒ『文化の神学』256頁。

51 同257頁。

52 同232～233頁。

53 同233頁。

54 パウク『パウル・ティリッヒ 1 生涯』209頁。

しかしこれは、ティリッヒの神学に欠陥があるとみなすべきではなく、単なる対象と方法のミスマッチと考えるべきであると思われる。例えて言えば、自然科学の問いに対して自然哲学でもって答えようとするようなものである。ティリッヒがこの論文で取り扱おうとしたのは、アメリカの歴史的现实であるが、歴史とは言うまでもなく個別性、独自性の世界である。しかし、ティリッヒが取っている方法は、「事象の背後にある真理の定式化」であり、それは高度な抽象化を伴う作業であり、個別的な具体性を捨象する作業でもある。換言すれば、それは個別性を個別性として捉えるのには適さない方法なのである。

このように見てくると、先に保留した、ティリッヒが信仰復興運動をまったく考慮しないのも、アメリカ史という研究分野そのものの未熟さよりも、ティリッヒ自身のメソッドに由来するとみなすべき事柄であるように思われるのである。

B 適切な歴史論のために何が必要か？

歴史の背後や根底にある意味や原理を探求しようとする、歴史哲学のような試みは、それはそれとして大いに意味も意義もある。しかし、そのような探求の前提となっているのは歴史的事実であり（ここでは、歴史的「事実」などというものがそもそもあり得るのか、というポスト・ファクト的な問いはさておく）、背後に遡るのはその後の作業になるであろう。その作業が不十分なままでは、先に指摘したような食い違いが起こってきってしまう。

例えば今回取り上げたような議論の場合、信仰復興運動から、理論軽視・実践重視の反知性主義的傾向は説明できるであろうし、教派・地域・宗教すら越えた広がりや、ピューリタンたちの信教の自由を巡っての戦い、寛容という決着から説明できるであろう。また、諸教派・諸宗教の共存状態は、ノミナリズムでなく政教分離や信教の自由の法制化といった歴史的出来事に由来を求めべきであり、それによって、ティリッヒが指摘するだけで説明できていなかった、教会の一社会団体化も説明できるであろう。こうしたことを踏まえた上でティリッヒがアメリカ解釈に再挑戦したとしたら、どのような洞察を我々は見ることになったであろうか。もはやそれを見ることが出来ないのは残念である。

最後に、繰り返しになるが、我々は早まってティリッヒ神学を全否定すべきでは断じてない。ただし、対象と方法のミスマッチは避けるべきであり、ティリッヒはしばしばそれを行ってしまっているように思われる。ティリッヒが『組織神学』で提唱している「相関の方法」は、問いと答えの相関であるが、我々はここに、問いと答えの間をつなぐ適切な探求方法、という第三の要素も相関させねばならないと考える。その視点を取り入れることによって、我々はティリッヒに対する的外れな批判に陥る誤りを避けることも出来るのである。

(あいざわ・はじめ)

フェリス女学院大学文学部准教授